

# 日本語学習者と日本語母語話者の読点使用に関する調査研究 — 日本語・中国語・韓国語・英語話者の 作文コーパスからの示唆 —

小林 しのぶ<sup>†</sup>

Research on the Use of Commas by Japanese Language learners  
and Native speakers of Japanese: Suggestions from corpora of writings  
by Japanese, Chinese, Korean, and English speakers

Shinobu Kobayashi

## 1. 研究の動機

### 1.1 研究動機

日本の読点の打ち方は、1946年『くぎり符号の使ひ方〔句読法〕(案)』(文部省国語調査室)によって現代国語文に適用する13のテンの条項が定められている。このように、句読点の打ち方は正式に一応の基準が示されている。しかし、学校教育であまり活用されていないがゆえに、読点の打ち方を習ったという感覚がなく、一般の人の読点の使用には多少の揺れが生じている。そのような状況のなか、日本語学習者は日本語母語話者よりも短期間で日本語の読点の使い方を身につけていく。筆者は日本語学校で非常勤講師をしているが、中国語母語話者の学生が書いた文に母語話者が通常打たないような読点を目にするのが度々あり、どうしてそのような打ち方をするのかと不思議に思ったことが読点に関する研究を行うきっかけとなった。

### 1.2 先行研究

#### 1.2.1 日本語の句読法に関する公的指針

日本にはこれまで句読法に関する公文書が正式に2つ示されている。1つは、明治時代の『句読法案・分別書き方案』の句読法案である。現行の国定教科書を修正する場合に従うべき標準とするために文部省(現在の文部科学省)で設けた教科書調査委員会の審議を経たものと説明されている。21箇条のテンの基準は、現代のものより構文論的で細かく基準が定められている。もう1つは、1946年(昭和21年)に文部省教科書局調査課国語調査室によって作成された『くぎり符号の使ひ方〔句読法〕(案)』である。『くぎり符号の使ひ方』の第1章の冒頭に「この案は、明治三十九年二月文部省大臣官房調査課草案の句読法(案)を

骨子とし、これを拡充してあらたに現代国語文に適する大体の基準を定めたものである」と述べられている。このことから、『くぎり符号の使ひ方』は、1906年(明治39年)の3月に文部大臣官房図書課によって示された『句読法案・分別書き方案』の句読法案(テンの項)の21箇条の法則をもとに、現代国語文に適用するように13の条項に定め直されたことがわかった。

#### 1.2.2 日本語における読点研究

読点の打ち方に揺れが生じているなか、多くの先行研究はさまざまな観点から読点の打ち方の基準や目安を検討してきた。

佐藤(2000)は、論述文作成において文章のリズム、作者の息づかいを示すものとしてのテンはその重要性が減じ、論理的構成のためのテンが重要性を増しつつあると述べている。

佐竹(2002)は、読点を打つ位置の目安は習慣から導かれ出されたものであり、理論的なものではないが、文構造との関係において理論的に読点の位置を定める考え方もあると述べている。それによって、文構造を論理的に示すことができ、よりわかりやすい表現が可能になると指摘している。

村越(2013)は、読点の打ち方の基準は厳密な原則に強く縛り付けるものから、より緩やかな目安のものまで多様化しており、1つの分類方法として言語学では一般的になっている統語論(syntax)、意味論(semantics)、語用論(pragmatics)の分類を使用することは可能だと指摘している。

石黒(2021: 2009改訂版)は、実態調査をもとに統計手法で研究を進めて読点の基準(目安)をまとめている。大

<sup>†</sup>2023年度修了(人文学プログラム)、現所属: ARC東京日本語学校非常勤講師

学の文章表現の講義の受講生（日本人学生）281名に読点に関する課題を出して読点の基準を調査した。そして、石黒は、受講生を対象にした課題の答えの統計的データの結果から、誰もが必ず打ちたくなくなる構造的な読点と人によって異なる読点の打ち方の基準の揺れがあることを明らかにしている（p.19）。

岩崎（2016, 2017a, 2017b, 2017c, 2017d, 2020a, 2020b, 2021, 2023）は、読点の基準を設けることを目的とせず、作文データベースをもとに実態調査を行い、統計分析から書き手が実際どのような読点を打っているのかをもとに研究を進める手法をとっている。岩崎（2017a）では、複文（従属節）を対象とし、JCK作文コーパス（日本語母語話者、韓国人学習者、中国人学習者による日本語作文を収録）を用いて、統計的手法により接続助詞直後における読点の分析と考察を行っている。そして、岩崎（2017b）では、日本語母語話者と日本語学習者がそれぞれ使用する係助詞と格助詞を対象として、JCK作文コーパスを用いて、直後に読点を使用されている場合と使用されていない場合を比較し、係り先の距離に有意差があるのかについて分析を行っている。また、岩崎（2020a）では、『北京日本語学習者縦断コーパス』（B-JAS）をもとに、日本語母語話者の作文と比較することで、中国人学習者の習熟度別に句読点の分析を行い、どのような傾向が見られるのかを考察している。さらに、岩崎（2023）では、これまでの句読点に関する研究についてまとめ、データベースをもとにどのような句読法が提示されてきたのかを示し、どのような視点から句読点に関する研究が行われてきたかを明らかにしている。

このように、年代とともに研究の目的や研究手法が変わってきたことがわかる。

### 1.3 これまでの先行研究からの気づき

これまでの日本語の句読法に関する先行研究において、読点の基準や目安を設けることを目的とした研究が多かった。村越（2013）や石黒（2021: 2009改訂版）が述べるように読点を打つ際に書き手は1つの基準だけで判断していない。その上、人による判断の揺れも生じている。このような読点の複雑さを考えると基準を設けることは、容易ではなく、限界が生じるだろう。筆者は先行研究で読点の役割という言葉が幾度も出現していたことに気づいた。読点の基準はどこに読点を打つかという一定の規則であるが、読点の機能は読点を持つ働きで、文に何かしらの効果を与えている。書き手は文を書くときに、読みやすく、分かりやすい文を書くために読点の機能を使うことができる。実際に文を書くときにどのような読点の機能を利用しているのかに着目して、基準の追究ではない異なる方向から読点の研究ができるのではないかという考えに至った。また、読点を指導する際に、基準だけでなく、読点の働きを中心に教えた方が意識的に読点の働きを使って文が書けるようになるだろう。筆者は、岩崎（2023）の研究路線を踏襲

し、作文コーパスをもとに読点の機能の使用実態調査を行い、日本語母語話者や日本語学習者がどのように読点の機能を使っているのかを探る。

## 2. 研究内容

### 2.1 研究目的

本研究は、日本語・中国語・韓国語・英語母語話者がどのような読点の機能を用いて日本語を書いているのかを作文コーパスデータを用いて実態調査し、その調査結果より日本語母語話者と日本語学習者の読点使用の傾向とその背景要因を明らかにすることを目的とする。

### 2.2 研究調査資料と対象

調査資料は、多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）の任意作文データ（エッセイ「私たちの食生活：ファーストフードと家庭料理」）を用いる。調査対象者はJFL（Japanese as a Foreign Language）環境で日本語を体系的に学んでいる学習者である。内訳は、日本語母語話者48名、中国語母語話者127名（台湾も含む）、韓国語母語話者95名、英語母語話者44名（ニュージーランド、オーストラリア、アメリカ）である。

### 2.3 分析方法

分析方法は、読点の機能的観点から類型を立て、実態調査の結果を客観的に評価するため量的分析の手法を用いる。

また、統計分析をしない項目においては質的アプローチによる分析を行う。

## 3. 読点の機能分類を立てるための事前準備作業と類型の確立

### 3.1 読点の機能分類を立てるまでの手順

読点の機能分類を立てる前の準備作業を行う。I-JASの日本語母語話者の作文データや新聞記事、文法書などによる文例の読点には、どのような共通した働きや役割があるのかを考察し、類別する。以下の手順で行う。

- ① 日本語を書くときに読点を打ちたくなくなる箇所を抜き出し、読点の働きについて気づいたことをまとめる。
- ② ①の気づきを踏まえ、資料の文例に打たれている読点を同じ働きごとにグルーピングしていく。仕分け作業の際の認定基準も定め、仕分ける。
- ③ グルーピングした読点がどのような要素として働いているのかを、分析・検討する。
- ④ 読点の類型を確立する。

### 3.2 事前準備作業での気づき

読点機能分類を立てる前に、読点自体がどのような働きを持っているのかを検討する。その作業での気づきを以下にまとめる。

日本語学習者と日本語母語話者の読点使用に関する調査研究  
 — 日本語・中国語・韓国語・英語話者の作文コーパスからの示唆 —

- ① 日本語母語話者は主題に読点を打つ傾向がある。また主部が長い場合に読点を打つ傾向もある。読点には主語と述語の骨組みを読み手にわかりやすく示す役割がある。
- ② 日本語は文の構造から主語と述語が離れることがあるため、また述部が文末にあるため、読点の役割には述部への係り先を示すという働きがあるのではない。また、離れた言葉に係ることもある。
- ③ 副詞的要素の語句は述語や文全体に係ることを読点で示す。自立語などの独立の成分には、他の成分と関係がないことを示す読点が打たれる。副詞・副詞相当句に打たれる読点は述語に係り、また文副詞・接続語に打たれる読点は文全体に係ることを示す。複文においては従属節の独立度が高い場合に読点が打たれる傾向がある (岩崎2017a)。
- ④ 読点には、「並べてつなぐ」という機能がある。語句と語句を並べてつなげて前後の関係を示したり、文と文を並べてつなげて対等な関係を示したりすることができる。
- ⑤ エッセイやコラムなど、軟らかいジャンルの文体では、書き手は特に感性や心情を表したいときに読点を打つことで表現する。(フォーカスの点)  
 上記の①～⑤をもとに、どのようなときに読点が打たれるのかを図1に示す。図1-①は単文の場合、図1-②は複文の場合である。

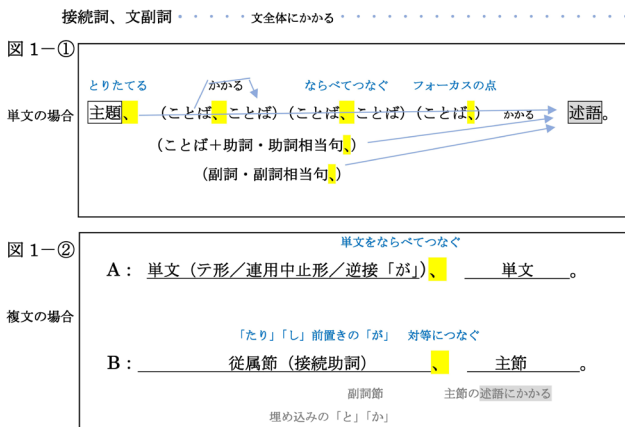


図1 読点の係り先

3.3 読点機能分類の7つの類型

前節の気づきをもとに検討を重ね、読点の機能を7つの大きな枠に分類する。読点の機能分類と下位分類を表1にまとめる。

4. 量的分析

4.1 機能分類による読点機能使用実態調査

多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) の作文データを用いて、母語別に読点の機能類型ごとの読点数を集計し、読点の機能使用実態調査を行う。

表1 読点の機能分類と下位分類

読点の機能類型	下位分類1	下位分類2
1) とりたて	とりたてて焦点を当てる ① 「は」 主題明示 ② 「は」以外の主題の表現や話題の提示 ③ 「は」以外のとりたて助詞	① 「は」 ② 「とは」、「のは」 話題を取り立てる表現 ③ とりたて助詞
2) 係り先明示	係り先を示す ① 述語・述部に係る ② 複文の副詞節が主節の述語に係る ③ 文全体に係る ／独立して文と係わる ④ 離れた言葉に係る	①a. 格助詞や助詞相当句 b. 副詞や副詞相当句 ②複文の副詞節 ③a. 文副詞 b. 接続語直後 c. 間投詞 ④直後ではなく、離れた言葉に
3) 助詞等の省略	・助詞の代わりに読点を打つ ・助詞ではない言葉の省略	
4) 並べてつなぐ	①語句を並べてつなぐ ・語句と語句をつなぎ、関係を示す ②文を並べてつなぐ ・文と文を対等につなぐ	①a. 並列 b. 同格的言い換え/例示 ②a. 単純な接続文 ・テ形 ・連用中止形 ・逆接「が」「けれど」 b. 複文「たり」「し」 前置きの「が」
5) 埋め込みを示す	文の一部としての埋め込みを示す	① 疑問の「か、」 ② 会話、引用の「、と」「と、」
6) フォーカスする	焦点を当てる 読点を打って、フォーカスを入れたところで切る	
7) その他	① 文法非標準的読点 ② 中間言語的読点 ③ 分かち書き的読点 (読点多用)	

4.2 量的分析の結果

読点機能の実態調査の全体の結果を概観する。母語ごとに調査人数が異なるため、分類した機能ごとの読点出現数をカイ二乗検定と残差分析によって統計検定を行った (js-STARを利用)。読点の機能類型は、「とりたて機能」「係り先明示」「助詞等の省略」「語句を並べてつなぐ」「文を並べてつなぐ」「埋め込みを示す」「フォーカスの点」の7つである。「並べてつなぐ」の機能は、つなぎ方が異なるため、「語句レベル」と「文レベル」の2つに分けた。

4.2.1 全体の調査結果

結果を表2にまとめる。表中および以下で述べる記号は、Jが日本語母語話者、Cが中国語母語話者、Kが韓国語母語話者、Eが英語母語話者を表し、また、▲/▼は有意水準1%、△/▽は同じく5%で、多い/少ないことを表す。表全体の分布に関し、誤差1%水準での有意差が認められた ( $\chi^2(18) = 190.865, p < .01$ )。次に、機能類型ごとに見ると、「助詞等の省略」以外で、何らかの有意差が認められた。「とりたて機能」でJが▲、Eが▽、「係り先明示」でJとKが▼、CとEが▲、「語句を並べてつなぐ」でJとKが▲、Cが▽、Eが▼、「文を並べてつなぐ」でJが△、Kが▲、Cが▼、「埋め込みを示す」でJが▲、Eが▽、「フォーカスの点」でJが▲、Cが▽となった。

表2 機能類型ごとの読点出現数と統計検定結果

	とりたて機能	係り先明示	助詞等の省略	語句を並べてつなぐ	文を並べてつなぐ	埋め込みを示す	フォーカスの点
J	▲127	▼340	3	▲111	△253	▲23	▲6
C	267	▲1689	18	▽254	▼715	25	▽2
K	132	▼684	7	▲170	▲415	11	3
E	▽65	▲533	4	▼36	225	▽3	1

$$\chi^2(18) = 190.865, p < .01$$

#### 4.2.2 下位分類の結果

値の大きかった類型は下位分類にも統計検定を行った(表3~6)。

##### 4.2.2.1 「係り先明示」下位分類1の結果

「係り先明示」の下位分類1にカイ二乗検定をかけた結果を表3に示す( $\chi^2(18) = 129.008, p < .01$ )。「間投詞」以外で、何らかの有意差が認められた。述語に係る「格助詞・助詞相当句」ではCが▲, Kが▼, Eが▽であった。述語に係る「副詞・副詞相当句」でJが△, Eが▼, 「複文 副詞節」でKが▼という結果であった。文全体に係る「文副詞」ではEが▲, Cが▽, 「接続語直後」でKが▲, JとCが▼となった。「離れた言葉に係る」でJが▲, Cが▼となった。

表3 「係り先明示」の読点出現数と統計検定結果

	格助詞・助詞相当句	副詞・副詞相当句	複文 副詞節	文副詞	接続語直後	間投詞	離れた言葉に係る
J	56	△50	118	19	▼88	0	▲9
C	▲264	198	553	▽85	▼581	4	▼4
K	▼60	70	▼177	40	▲328	1	8
E	▽53	▼36	177	▲52	213	0	2

$$\chi^2(18) = 129.008, p < .01$$

##### 4.2.2.1.1 「係り先明示」下位分類2の複文の副詞節が主節の述語に係る「複文の副詞節」の読点

「係り先明示」の下位分類2の「複文 副詞節」はどの母語話者においても出現数が多かった。カイ二乗検定をかけた結果は表4の通りであった( $\chi^2(24) = 59.920, p < .01$ )。「継起」と「原因・理由」ではJが▽, 「逆接・対比」ではJが▲, Cが▼, 「逆条件」ではJが▲, 「様態」ではKが▲, Eが▽となった。その他において有意差はなかった。

表4 「複文 副詞節」の読点出現数と統計検定結果

	継起	条件	原因・理由	逆接・対比	逆条件	時	目的	引用	様態
J	▽0	42	▽28	▲10	▲16	14	6	0	2
C	18	192	184	▼4	39	70	28	1	17
K	4	53	64	5	18	14	8	0	▲11
E	8	71	54	6	14	15	9	0	▽0

$$\chi^2(24) = 59.920, p < .01$$

##### 4.2.2.1.2 「係り先明示」下位分類2の文全体に係る「接続語直後」の読点

表5は文全体に係る「接続語直後」の読点出現数のカイ二乗検定を行った結果である( $\chi^2(21) = 59.305, p < .01$ )。結果を見ると、「順接」ではCが△, Kが▽で、「並列・添加」ではCが△, Kが▼で、「列挙」ではCが▽, Kが▲と、逆方向に結果が出ている。「帰結」ではKが▲となった。「逆接」では有意差はなかった。

表5 「接続語直後」の読点出現数と統計検定結果

	順接	逆接	並列・添加	対比・選択	転換・補足	列挙	言い換え	帰結
J	3	26	28	7	9	5	8	2
C	△64	182	△171	55	△49	▽28	▼27	14
K	▽21	117	▼65	34	15	▲31	27	▲18
E	23	72	59	▽9	▽7	14	△23	6

$$\chi^2(21) = 59.305, p < .01$$

##### 4.2.2.2 「並べてつなぐ」下位分類1の「文を並べてつなぐ」

「文を並べてつなぐ」の読点のカイ二乗検定の結果を表6に示す( $\chi^2(9) = 257.937, p < .01$ )。この項目においても「係り先明示」と同様に、JとK, CとEが「連用中止形」の項目で同じ方向に有意差が見られた。「テ形」ではJとKが▼, Cが▲, 「連用中止形」ではJが▲, Kが△, CとEが▼, 複文の「し」「たり」ではJが▼, Eが△となった。逆接の「が」「けれど」は, n.s. (not significant) で, 有意差は認められなかった。

表6 「文を並べてつなぐ」の読点出現数と統計検定結果

	テ形	連用中止形	逆接「が」「けれど」	複文「し」「たり」
J	▼23	▲161	35	▼34
C	▲330	▼115	114	156
K	▼113	△132	70	100
E	87	▼41	35	△62

$$\chi^2(9) = 257.937, p < .01$$

#### 4.3 量的分析の結果考察

統計検定により有意に関連が見られた類型と値が大きく出た下位分類のカイ二乗検定の結果についての分析・考察により, 3つのことが明らかになった。

1つ目は, 全体の結果から言語構造が似ている言語に同じような結果が出たことが分かった。JとK, CとEが同じような結果になった項目があった(表2)。特に, JとKの読点使用に相似点が多く見られた。

2つ目は, 類型の下位分類の結果(表3)から, 各言語の母語話者の読点使用の特徴を見ることができた。「係り先明示」の下位分類1の統計分析の結果を見ると, Jは副詞・副詞相当句に, Eは文副詞に, Cは助詞相当句に, Kは接続語直後に有意差が見られた。日本語学習者の文には各々

日本語学習者と日本語母語話者の読点使用に関する調査研究  
 一 日本語・中国語・韓国語・英語話者の作文コーパスからの示唆 一

の母語の言語における特徴が見られることにより、母語をベースに日本語の文を組み立て言語化されたのではないかと考えられる。

3つ目は、各言語の母語話者の読点の打ち方においては母語による影響があるかどうか、わからないものもあった。「語句を並べてつなぐ」ではEが有意に少ないこと(表2)や「文を並べてつなぐ」においては「テ形」でCが有意に多いということ(表6)は、さまざまな並列の表現方法の中からEやCにとって使いやすい方法を選択して文を作成しているからではないかと考えられる。

## 5. 質的分析(第二言語習得の中間言語的読点)

### 5.1 第二言語習得における母語の影響

本研究では、読点類型を大きく7つに分け、その中に「その他」を設けた。ここでは、その中の「中間言語的読点」を取り上げる。本研究の中間言語的読点とは、同じ母語の日本語学習者が学習段階において通常打たないようなところで打つ読点を指す。そして学習が進んだ段階で違和感のない自然な打ち方ができるようになる読点である。

「中間言語的な読点」は中国語母語話者(C)49件と英語母語話者(E)8件が出現した。韓国語母語話者(K)の1件は入力ミスによるものだった。この「中間言語的な読点」を第二言語習得論の中間言語研究の観点から考察する。

第二言語習得論には中間言語研究がある。迫田(2020b)は、中間言語は習得段階に応じて変化する体系なので、母語を手掛かりとして目標言語へと向かっていくさまざまな段階の、ある時点での言語体系を指す場合(一時点における中間言語)と、その連続体としての言語体系を指す場合とがあると指摘している。中間言語的読点が登場したCの49件とEの8件における特徴とその要因は何だろうか。次の節で考察する。

### 5.2 中国語母語話者の文の接続における「中間言語的読点」

中国語母語話者(C)のエッセイにおいて、日本語母語話者が通常打たないような読点が49件出現した。筆者は日本語学校で中国語母語話者が書いた記述文で同じような読点の打ち方を度々目にしている。Cの49件の読点は本研究の読点の機能タイプのいずれにも該当しない。以下に、49件のなかから文例を2つ示す。

- (1) そして買い出し準備も必要ないし後片付けもいらな  
い。まさしく面倒人にも向いている。(CCH08)
- (2) 私は【大学名】に来て日本語に勉強して一年になりました。湖南省の伝統的な料理はどんなに美味しくても、辛くてここの料理に適応できません。(CCH25)

(1)を見ると、「そして買い出し準備も必要ないし後片付けもいらな  
い」で一文が終わっているの  
で、日本語では句点「。」を打つが、CCH08の学習者は読点で次の文をつ

なぎ、「まさしく面倒人にも向いている」で句点「。」を打っている。他の不自然な読点は、(1)と同じ打ち方であった。等位接続のように2つの文をつなげるときに「。」ではなく、「、」を打っている。水野(2000)は、中国語と日本語の「。」の相違点において、「。」は中国語では通常意味が完全な文末につけるが、一方現代の日本語では文の終わりにつけると述べている。上記の文例のような読点を打ったCは中国語で文を考え、中国語の逗号「、」を打つように日本語の読点「、」を打っているのではないかと考えられる。

次に『句読法案・分別書き方案』(1906)と『くぎり符号の使ひ方』(1946)から読点の打ち方を考察する。1906年(明治39年)に文部大臣官房図書課が示した『句読法案・分別書き方案』の句読法案(テンの項)の二十一箇条の法則の第一条に文末の読点に関する法則が書かれている。以下は、句読法案の第一条の法則と用例である。

第一条：形式ヨリ見レバ終止シタレドモ意義ヨリ考フレバ次ノ文ニ連続セルモノノ下

用例一、和助が樹の下を出て、まだあまり遠くも行かぬ時のことでありましたが、目が暗む様なないなびかりがすると一緒に、耳が裂ける様な恐ろしい音がしました。

用例二、皆さんは蝙蝠を鳥だと思いましたがせうが、蝙蝠は鳥ではありません、頭もからだも鼠に似て居るけものです。

上記の明治時代の『句読法案・分別書き方案』の句読法案の第一条は、「形式的に文末が終止形であっても、次の文と意味的につながっている場合は、文末に読点を打つて、次の文に続けて書くことができる」と説明している。次に『くぎり符号の使ひ方』はどうだろうか。『くぎり符号の使ひ方』の第二条にも同じような内容が示されているので、比較する。以下に、準則と用例を挙げる。

第二条：終止の形をとっていても、その文意が続く場合にはテンをうつ。ただし、他のテンとのつり合い  
上、この場合にマルをうつこともある(用例3)。

用例(1) 父も喜んだ、母も喜んだ。

用例(2) クリモキマシタ、ハチモキマシタ、ウスモキマシタ。

用例(3) この真心が天に通じ、人の心をも動かしたのであろう。彼の事業はようやく村人の間に理解されはじめた。

『句読法案・分別書き方案』と『くぎり符号の使ひ方』の上記のそれぞれの説明と用例が少し異なっている。『くぎり符号の使ひ方』には、用例(3)を提示し、他のテンとのつり合い上、マルを打つこともあると書かれている。用例(3)のように文が長くなった場合、他の機能のテンが打たれているとわかりづらい文になるからである。しかしながら、現代においては文の終わりにマルを打つことが浸透しているため、マルを打つ人が多いと思われる。先に紹介したCが書いた文例(1)と(2)の読点の使い方は『句読法案・分別

書き方』の句読法案の用例と似たような読点の打ち方をしている。49件の文を書いたCは、文意が続く場合に中国語の「,」の感覚で日本語の文にテンを打って文を接続しているのではないか。その際、文中の他のテンとのつり合いを考えて、テンやマルを打っていないと思われる。日本語と中国語の句読点の使い方の相違を理解し、習得すれば出現数が減っていくと推測される。

### 5.3 英語母語話者の文の接続における「中間言語的読点」

一人の学習者のエッセイの中に8件出現した。以下の文例の(3)は動詞と動詞を連結するとき、母語で同じように文を考えて読点を打った例で、文例の(4)は条件節がまだ上手く使えておらず、終止形に読点を打って、文を接続している例である。(3)の読点は文の等位接続の「,」に相当し、(4)の読点は仮定のif節末に打たれる「,」に相当する。学習者にとって文の並列や条件節の複文は学習段階のため難しく、英語で文を構想し、それを日本語にしたのではないかと推測される。

(3) 子供がお父さんとお母さんから料理するをべんきょうします、とれんしゅうします。(EUS08)

The children learn to cook from their father and mother, and practice.

(4) もし、ファストフードが毎日食べます、それはとても高いです。(EUS08)

If you eat fast food every day, it is not very cheap.

### 5.4 質的分析のまとめ

上記で述べたように、Cの49件は母語の「,」の感覚で、文意が続く場合にテンを打ち、Eの8件は日本語の文法が学習段階で上手く使えないため、母語の文法を適用してテンを打ったと考えられる。

第二言語習得において、日本語学習における母語の影響に関してさまざまな研究がなされている。馮(1999)は中国語母語話者の日本語構文文法の学習過程における母語の影響を中心に研究し、中国人成人の日本語学習者は、日本語の構文文法よりも中国語の構文文法に従いながら日本語を学習していると述べている。迫田(2020b)は第二言語習得の言語転移の例として、英語母語話者が英語での表現を日本語に直訳してしまった文例を紹介している。例えば、単語を与えて日本文を作成する回答例に英語の語順で作られた文があったという。このように第二言語習得理論の観点からも、第二言語学習者は母語の文法に従いながら文を作成する傾向があることがわかった。

したがって、Cの49件もEの8件も母語をベースに日本語の文を考えたことによる中間言語的な読点の打ち方であると解釈できるのではないと思われる。母語の文法をもとに日本語の文を考えるならば、必然的にその文中にも学習段階途中での中間言語的読点が現れると考えられる。

## 6. 結論

横断的な視点から考察したことをまとめる。

### 6.1 日本語母語話者の読点の特有な打ち方

統計分析の結果から、日本語母語話者がよく打つ読点が浮き彫りになった。読点の種類の7つのうち、5つの種類(「とりたて機能」「語句を並べてつなぐ」「文を並べてつなぐ」「埋め込みを示す」「フォーカスの点」)で有意に多いという結果である。日本語母語話者は読点のさまざまな機能を駆使して、文を書いている。日本語はSOV構造のため、主語と述語が離れる傾向がある。「フォーカスの点」以外は、SOV構造でわかりやすい文を書くために、日本語母語話者がよく使う読点の働きだと考えられる。

### 6.2 傾向が似ている言語グループの読点使用の特徴

統計分析の結果を全体で俯瞰すると、日本語母語話者(J)と韓国語母語話者(K)、中国語母語話者(C)と英語母語話者(E)で同じ方向に同じ結果が出た項目が複数あった。

これは、JとK、CとEの言語に近似性が見られることが要因であると考えられる。

まず、JとKを見ていく。一般的に日本語と韓国語の言語は似ていると言われている。野間(2014b)は、日本語と韓国語は文の構造や単語の構造の双方において相似形をなしていると述べている(p. 22)。そのため、韓国語母語話者は日本語を考える際に、韓国語を日本語に置き換えて考えることも可能で、読点の打ち方も共通している部分が多いと思われる。また、ハンゲル正書法の休止符の原則(呉1992, 109-111)には、日本語の「くぎり符号の使ひ方」と似ている項目が複数見られる。ただし、以上のような類似点ばかりでなく、相違点もある。それはKが全般的に読点をあまり打たない傾向があることである。Kは長文や複雑な文でも読点をあまり打たないため、構造的にわかりにくい文が散見される。筆者は4言語の母語話者(J, C, K, E)を対象にI-JASコーパスの作文データを用いて「一文当たりの読点数」「読点数」「読点間の文字数」を調査した。その結果、Kの「読点間の文字数」の数値が4言語の母語話者の中で最も大きく、KがJ, C, Eに比べて読点をあまり打たないことがわかった。さらに「長文人数率」と「読点無し長文人数率」についても調査を行った。長文の基準は50文字以上の文とした。その結果から、以下のことがわかった。

1) 「長文人数率」はCが最も高い。次いでJ, E, Kの順で、Kが最も低い。

2) 「読点なし長文人数率」は、Kの割合が著しく高い。

Kは、長文を書く人が少なく、読点を打たずに長文を書く人が多い。普通は長文を書くとき読点を打つことが多いが、Kは読点なしの長文を書く特徴があることが結果から明らかになった。李(2020)は、韓国語において読点

日本語学習者と日本語母語話者の読点使用に関する調査研究  
 一 日本語・中国語・韓国語・英語話者の作文コーパスからの示唆 一

をたくさん打つ文章は良い文章だと見なされないという考えがあると述べている。また、「分かち書き」から読点が少ないことは韓国語の特色でもあるが、辛(2014)は新聞社の新春文芸当選作を考察した結果、最近の傾向として文章の短さ、読点の少なさ、テンポの速い文章、直感的でストレートな表現が見られ、本来必要な個所にも読点を打たない傾向があると指摘している。Kが考える洗練された文章とは、あまり読点を打たずに途切れることなく書かれた文章だという思考があるのではないかと考えられる。

次に、CとEを見ていく。CとEは「係り先明示」「語句を並べてつなぐ」(下位分類)で同じ方向に同じような結果が出ている(表2)。これは中国語と英語には言語構造においてSVOの語順で、助詞がないなど、類似点があるからであろう。棚橋(2003)は、文法構造の「言語の類型」の説明において中国語は語形が変化せずに文法的機能が語順と機能語の使用によって示されるため、語順が重要性をもつ言語であると述べている。また、棚橋は英語においては名詞や冠詞の格変化がなくなったため、語順の制限がドイツ語やフランス語と比べて厳しいと比較している。棚橋の説明により中国語と英語においても幾つかの類似性があることがわかった。そして、対照言語的に中国語と英語は日本語とは遠い言語であるため、母語の文の構造から日本語の読点の打ち方にも相違点が必然的に出てくると考えられる。

以上のように、言語構造が似かよっている母語話者間の読点の打ち方には、近似性が見られた。

### 6.3 日本語学習者の特有な読点の打ち方からの考察

#### 6.3.1 読点の打ち方に見えた共通性

日本語学習者の読点の打ち方には共通した特有な読点の打ち方が見られた。日本語学習者が日本語を書く際に、それぞれの母語で文を考えて日本語に置き換えている学習者が多いことが推察された。「係り先明示」の統計分析の結果(表3)を考察したところ、学習者の傾向が統計検定の結果とおおむね合致している。また、「文を並べてつなぐ」の結果を見ると、単純な文の接続や並列表現方法(テ形、連用中止形、複文の「たり」「し」など)において使用傾向が各母語によって異なることがわかった。

#### 6.3.2 母語別に見えた日本語学習者の読点使用傾向

母語別に読点使用の傾向を以下にまとめる。

##### ①中国語母語話者(C)

機能類型ごとの統計分析の結果(表2)で、日本語母語話者(J)と反対方向に結果が出ていた。

- ・「係り先明示」の読点が有意に多い。Jの読点の使い方とは異なる。
- ・「語句を並べてつなぐ」「フォーカスの点」の読点が有意に少ない。
- ・「文を並べてつなぐ」の読点が有意に少ないが、特徴として「テ形」の読点の出現数が多い。

##### ②韓国語母語話者(K)

他の母語話者と比較して、読点の使い方がJと似ている。

- ・「係り先明示」の読点が有意に少ない。
- ・「語句を並べてつなぐ」「文を並べてつなぐ」の読点が有意に多い。

Jと唯一異なる方向に結果が出た項目があった。

- ・「係り先明示」の下位分類1の「接続語直後の読点」が有意に多い。Kの読点使用の特徴であると思われる。

##### ③英語母語話者(E)

統計分析の結果は、機能類型においてJとは反対方向に結果が出た。

- ・「とりたて機能」が有意に少ない。
- ・「係り先明示」の読点が有意に多い。特に、「文副詞」の読点が有意に多い。
- ・「語句を並べてつなぐ」「埋め込みを示す」の読点が有意に少ない。

#### 6.3.3 日本語学習者への読点指導

これまでの考察で、日本語学習者は日本語母語話者(J)がよく使う読点の機能をあまり使っていないことがわかった。日本語でよく使われる読点の働きがあることを学習者が認識できるように、指導法を考える必要があるだろう。母語ごとに具体的な指導項目(内容)の1例を挙げる。

##### ①中国語母語話者(C)

「係り先明示」の「格助詞」の読点を指導する。Cは典型的な「格助詞」に読点を打つより、「～について」「～にとって」「～として」などの「助詞相当句」に機械的に打つ傾向が見られた。「助詞相当句」を使っても文法上の間違いがなければ問題はないが、典型的な格助詞につく読点がどのような場合に打たれるのか、またどのような働きをしているのかを理解すれば、読点の働きを考えて文が書けるようになるだろう。

##### ②韓国語母語話者(K)

日本語の読点と韓国語の「,」の使用目的の相違点を指導する。先の「傾向が似ている言語グループの読点使用の特徴」(8.2)で述べたように、Kは読点をあまり打たない傾向がある。韓国語の「,」は文中で短い休止符を表すと言われている(呉1992, 109)。Kは、読点を休止符という感覚で捉えているのか、文の流れを止めない方が良いという意識があるように思われる。日本語の場合は、読みやすい文を書くために読点を使用するという考えがある。この相違点を指導すると、より自然な文が書けるようになると思われる。

##### ③英語母語話者(E)

「とりたての機能」特に、主題明示の「は」を指導する。機能類型ごとの統計分析の結果(表2)で、「とりたて機能」は有意に少ないという結果であった。文の長さにも関係するが、Jは主題を明示する「は」をよく使う。特に、「は」までの修飾部が長いときや述語までの距離が遠い場合に構造を分かりやすくするため打つ傾向があ

ることを指導すると良いだろう。

#### 6.4 本研究の課題

最後に、明らかにできなかった課題もあった。本研究の調査対象者は海外のJFL (Japanese as a Foreign Language) 環境で日本語を体系的に学んでいる学習者のみであった。調査対象を海外と国内の学習者で比較し、母語の影響において違いが出るかどうか調査することも必要である。また、本研究はコーパス調査からの実態調査のため、書き手がどのような意図で読点を打ったのかなど内面的な考えまで探ることはできなかった。書き手が読点にどのような働きをさせたかったのかを客観的に判断するのが難しいケースもあった。これらの点が今後の課題だと思われる。

#### 謝辞

本研究を行うにあたり、指導教員として終始多大なご指導を賜りました放送大学大学院文化科学研究科教授、滝浦真人先生に心より感謝申し上げます。また、合同ゼミでご指導いただきました大橋理枝先生、宮本徹先生に感謝申し上げます。本研究では「多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS」の作文データを使用させていただきました。関係者の皆さまには深く御礼申し上げます。

#### 文献

- 石黒圭 (2021) 『よくわかる文章表現の技術 I - 表現・表記編 -』【新版】(初版2009) pp.1-33. 明治書院
- 李承俊 (2020) 「韓国語教育における翻訳の活用の試み - 大江健三郎『万延元年のフットボール』の韓国語翻訳を事例に」『愛知学院大学語研紀要』45(1), pp.157-175.
- 岩崎拓也 (2016) 「中国人・韓国語学習者の作文に見られる句読点の多寡」『一橋日本語教育研究』4, pp.187-196. ココ出版
- 岩崎拓也 (2017a) 「正確で自然な読点の打ち方」石黒圭 (編) 『わかりやすく書ける作文シラバス』第5章, pp.75-96. くろしお出版
- 岩崎拓也 (2017b) 「日本語学習者の作文コーパスから見た読点と助詞の関係性」『一橋大学国際協力センター紀要』8, pp.27-39. 一橋大学国際教育センター
- 岩崎拓也 (2017c) 「読点が接続詞の直後に打たれる条件 - 決定木を用いた分析」『計量国語学会第六十一回大会予稿集』pp.31-37. 計量国語学会
- 岩崎拓也 (2017d) 「読点が接続詞の直後に打たれる要因について - 一般化線形モデルを用いた予測モデルの構築」『言語資源活用ワークショップ2017発表論文集』pp.55-62. 国立国語研究所
- 岩崎拓也 (2020a) 「習熟度別に見た中国人日本語学習者の読点使用の分析」『第31回第二言語習得研究会

- (JASLA) 全国大会予稿集』pp.44-49.
- 岩崎拓也 (2020b) 「中国人日本語学習者の接続詞直後の読点使用の分析」『NINJAL国際シンポジウム第11回日本語実用言語学国際会議予稿集』pp.84-87.
- 岩崎拓也 (2021) 「接続語の直後の読点をどう指導すべきか」李在鎬 (編) 『データ教育と日本語教育』pp.264-283. ひつじ書房
- 岩崎拓也 (2023) 『現代日本語における句読点の研究 研究外観と使用傾向の定量的分析』ココ出版
- 大類雅敏 (編) (2006) 「読点」「くぎり符号の使い方」『句読点活用辞典』pp.35-40, pp.242-251. 栄光出版社
- 木山幸子 (2016) 「語用論調査法」『語用論研究法ガイドブック』加藤重広・滝浦真人 (編) pp. 261-278. ひつじ書房
- 呉満 (1992) 「休止符」『ハングル正書法の解説』pp.109-111. 白帝社
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (共編著) 佐々木藍子・須賀和香子・野山宏・細井陽子・八木豊 (著) (2020a) 『日本語学習者コーパスI-JAS入門：研究・教育にどう使うか』くろしお出版
- 迫田久美子 (2020b) 改訂版『日本語教育に生かす第二言語習得研究』pp.27-33, pp.82-94. アルク
- 佐竹秀雄 (2002) 「符号の問題」飛田良文・佐藤武義 (編) 『現代日本語講座第6巻文字・表記』pp.104-126. 明治書院
- 佐藤政光 (2000) 「日本語の読点について - 規則の再検討一」『明治大学教養論集』331: 1-18.
- 芝原宏治・林嵐娟・梁淑珉 (2010) 「日本語の句読法」「中国語の句読法」「韓国語の句読法」『日中韓英の句読法と言語表現』(知の対流Ⅲ) pp.3-150. 清文堂出版
- 芝原宏治 (2013) 『テンとマルの話 - 句読点の落とし物 / 日本語の落とし物』pp.209-269. 初版松柏社
- 辛大基 (2014) 「韓国語教育におけるテキストとしての韓国小説とその表現 (其の一)」pp.71-90. 『千葉大学人文社会科学研究』第29号
- 棚橋明美 (2003) 「言語の構造 - 対照言語学を中心に -」月刊『日本語』日本語教育能力試験対策第6回, 2003. 9月, p.77 アルク
- 野間秀樹 (2014a) 『日本語とハングル』第4章, 第5章, pp.104-204. 文芸春秋
- 野間秀樹 (2014b) 『韓国語をいかに学ぶか 日本語話者のために』pp.13-25. 平凡社新書
- 馮富榮 (1999) 『日本語学習における母語の影響』pp.1-33, pp.139-152. 風間書房
- 文化審議会 (2022) 公用文作成の考え方 (建議) (付) 「公用文作成の考え方 (文化審議会建議)」解説
- 文化庁 (2002) 「文化審議会建議『公用文作成の考え方』について」<[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93651301\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93651301_01.pdf)> (2023年12月8日最終閲覧)



日本語学習者と日本語母語話者の読点使用に関する調査研究  
— 日本語・中国語・韓国語・英語話者の作文コーパスからの示唆 —

- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法－改訂版－』  
pp.1-5, pp.41-61, pp.181-214. くろしお出版
- 水野麗子（2000）「中国語と日本語における「句読点」の  
対比」『明治学院大学外国語教育所紀要』10, 81-97.
- 村越行雄（2013）「句読点の方法論的分析—読点をどこ  
に、なぜ打つのか」『コミュニケーション文化』7,  
pp.1-11. 跡見学園女子大学
- 文部省国語調査室編（1946）『くぎり符号の使ひ方〔句読法〕  
（案）』<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1126388/1>>  
国立国会図書館デジタルコレクション（2023年11月30日  
最終閲覧）
- 文部大臣官房図書課（1906）『句読法案・分別書き方案』  
<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/903921>>国立国  
会図書館デジタルコレクション（2023年11月30日最終  
閲覧）
- 林嵐媚（2010）「第二章中国語の句読法」『日中韓英の句  
読法と言語表現 知の対流Ⅲ』 pp. 68-92. 清文堂出版
- 梁淑珉（2010）「第三章韓国語の句読法」『日中韓英の句  
読法と言語表現 知の対流Ⅲ』 pp.93-112. 清文堂出版
- 林嵐媚（2013）「付録D 中国語の句読符号」『テンとマル  
の話』 p.234芝原宏治著 松柏社

## コーパス

- 国立国語研究所（2022）『多言語母語の日本語学習者横断  
コーパス』バージョン2022.5  
<[https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lisaj/ijas-search-info.  
html](https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lisaj/ijas-search-info.html)>